

フランス語の「名づけ」の構造

倉方秀憲

はじめに

フランス語の「名づけ」の仕組みを探り、その構造を明らかにするのが本稿の目的である。「命名」や「ネーミング」と言い換えてもよいが、前者は人の名前、後者は商品の名前というイメージを伴いがちなので、先入観の少ない呼び方を選んだ。名づける対象は、ひとつの概念として認識しうるものであれば、具体物・抽象物、行為・出来事・事態のいずれでもよく、それが実在するか否かも問わない。ただし本論考においては、論点を拡散させないために、対象を主として具体物に限定する。具体物だけでもその数は膨大であり、取り上げるのは代表的、典型的なものに絞らざるをえない。また、さまざまな立場や観点から名づけができるので、同一対象に複数の名前がついていることがある（動植物の学名と通名、人の本名とニックネーム、器物の呼び名など）。加えて、日本語では和語、漢語、カタカナ語などによる呼称や表記が可能なので、対象の名前がフランス語と日本語で一对一の対応をしないことが多々ある。

さて、どの言語共同体においても、ものの名前はすでに決まっていて、人はふつう名づけの由来を知らず、あるいは意識せずに使っている。このことは単一の要素である単純語についてはほぼ当てはまる。しかし、いくつかの要素を組み合わせて作った複合語や派生語の場合は、初めて接することばであっても、どのようなものを指すのか大方の察しがつく。名前からその指示対象を推測できるのは、名づけ方についての知識を共有しているからである。

名前は本来、ものを識別するためのレッテルであるから、ほかと区別をつく名前をつけるのは当然である。だからといって、無意味なことばや記号を用いることはふつうはない。名づけの対象の実体を（必ずしも忠実にではないが）反映した、わかりやすい名前をつける。どうしたらわかりやすい名前になるか。情報を伝えるときの一般的配慮と同様である。知っている事柄をベースにし、概貌から細部に及ぶ。これを名づけの手順に適用すれば、まず、名づけの対象を周知のもの的一种であると捉えて、対象が属するカテゴリー名を名前の中心（フランス語の場合は名前の先頭の位置）に据える。そして、同じカテゴリーの他種と区別するために、対象の特徴を言い表す語句を添える。したがって、語の形態としては、通常、2つ以上の要素を結合した複合語になる。

対象の特徴を説明するには、その形状や性質、機能などを述べるのが通例だが、「何に似ている」とか「何と関連がある」など、よく知られているものを引き合いに出すこともできる。またしばしば、何々の一種であるという分類は明示せず、似ているものや関連のあるものをそのまま名前にしたり、名前の主体にする。実際の対象物が何であるかは常識でわかることが多いが、想像力を必要とする場合もある。余分な情報を省いた簡潔な表現は、対象の特徴を強調し、訴求効果を高める。このタイプの名前には、複合語だけでなく、接尾辞を付加する派生語も用いられる。

要するに、名づけでは、対象が何の一種であるか（包括関係）、何に似ているか（類似性）、何と関連があるか（関連性）のいずれかに重点が置かれる⁽¹⁾。おのおの、「包摂関係に基づく名づけ」、「類似性に基づく名づけ」、「関連性に基づく名づけ」と呼ぶことにしよう。以下の第1節から第3節において、それぞれの名づけで用いる語形態を示して、例を添えてゆく⁽²⁾。第4節から第6節では、名づけのプロセスや分類に関する問題点を考察する。

1. 包摂関係に基づく名づけ

名づけの対象となるものが何かの一種である場合、その何かを上位カテゴリーまたは「類」、対象物を下位カテゴリーまたは「種」という。類と種の包摂関係に基づく名づけは、基本的には、上位カテゴリーを指す語（＝主要部）に他の語句（＝補足部）を加えた複合名詞⁽³⁾の形態をとる。

(1) [名詞＋形容詞] / [形容詞・接頭要素＋名詞]

上位カテゴリーを指す名詞に、対象物の特徴的属性を示す形容詞や接頭要素⁽⁴⁾を付加して、下位カテゴリーの種別名を作る。綴りに関しては、複合名詞を構成する語や要素をハイフンで結んだり、1語として続けて書いたりすることがあり、綴り方が一定していないものもある（以下に挙げる例では、使用が任意なハイフンをかっこに入れて示す）。

[名詞＋形容詞]

fauteuil roulant（「肘掛椅子」＋「車で動く」→）「車椅子」

fer-blanc（「鉄」＋「白い」→）「ブリキ」

poisson rouge（「魚」＋「赤い」→）「金魚」

[形容詞＋名詞]

grand magasin（「大きい」＋「商店」→）「デパート、百貨店」

petit(-) pois（「小さい」＋「豆」→）「グリーンピース」

sage-femme（「賢い」＋「女」→）「産婆、助産婦」

[接頭要素＋名詞]⁽⁵⁾

demi-bouteille（「半分の」＋「瓶」→）「ハーフボトル、小瓶」

minibus (「小さい」 + 「バス」 →) 「小型バス」

polyclinique (「多数の」 + 「病院」 →) 「総合病院」

(2) [名詞₁ + 前置詞 + 名詞₂]

名詞₁が上位カテゴリーを表す主要部である。名詞₂は名詞₁に関係するさまざまな事物を指す。この構成の補足部の前置詞はàかdeがほとんどである⁽⁶⁾。名詞₂は一般に無冠詞だが定冠詞が付くものもあり⁽⁷⁾、名詞₂の代わりに不定詞も用いられる。以下に、前置詞のàまたはdeを含む複合名詞を、名詞₁と名詞₂の関係性によっておおまかに分類して示す。

[名詞₁ + à + 名詞₂]

補足部はおもに次のような意味を表す。なお、これから例示する複合語では、構成する個々の要素の意味が明らかである場合は訳語を付さない。

(a) 用途 — 「……に用いる」

brosse à dents 「歯ブラシ」

machine à laver 「洗濯機」

tasse à thé 「茶碗、ティーカップ」

(b) 燃料、動力、道具 — 「……で動く、……を用いる」

cuisinière à gaz 「ガスレンジ」

moulin à vent 「風車」

peinture à l'huile 「油絵」

(c) 付属、含有 — 「……の付いた、……を含んだ」

café au lait 「カフェオレ、ミルク入りコーヒー」

chemise à manches longues 「長袖シャツ」

soupe à l'oignon 「オニオンスープ」

(d) その他の特徴

bête à bon Dieu 「テントウムシ」(字義は「神様の虫」。言い伝えに由来する名づけ)

magasin à prix unique 「均一価格の店、廉価販売店」

ouvrier à la journée 「日雇労働者」

[名詞₁ + de + 名詞₂]

deで導かれる補足部は、àの補足部よりも抽象性が高く、関係する事柄や領域を表すことが多い。主要部の名詞が人工物を指す場合、補足部はしばしば用途や目的のニュアンスを伴う。

(a) 関連 — 「……に関する」

camarade de classe 「同級生、クラスメート」

carte de crédit 「クレジットカード」

ceinture de sécurité 「安全ベルト」

lunettes de soleil 「サングラス」

roman d'amour 「恋愛小説」

(b) 材料、産地 — 「……で作られた、……製の」

chapeau de paille 「麦藁帽子」

huile d'olive 「オリーブ油」

moutarde de Dijon 「ディジョンマスタード」

(c) その他の特徴 — 「……を含む、……を帯びた」

livre d'images 「絵本」

tache de rousseur 「そばかす」(字義は「赤茶色のしみ」)

(3) 〔名詞₁ + 名詞₂〕

フランス語では修飾語が被修飾語に後続するのが原則であるから、この構造の複合名詞も、名詞₁が主要部で名詞₂が補足部になる⁽⁸⁾。前置詞を用いないこの構造は、前置詞の意味による制約がないため、より自由に2つの名詞を結びつけることができる。とりわけ、「名詞₁であるが名詞₂の役割も果たす、名詞₁であるが名詞₂のような様子をしている」と解釈できるような、名詞₁の側面的特徴を表すのに便利な形態である。なお、複合名詞の性は主要部である名詞₁の性と一致する⁽⁹⁾。

以下はおおまかな目安による分類である。どちらとも解釈できる表現もある。

(a) 名詞₂は兼用、兼備、付随するもの。

camion-citerne (「トラック」 + 「水槽、タンク」 →) 「タンクローリー」

crème caramel (「クリーム」 + 「キャラメル」 →) 「カスタードプリン」

point-virgule (「ピリオド」 + 「コンマ」 →) 「セミコロン」

tailleur-pantalon (「テーラードスーツ」 + 「ズボン」 →) 「パンツスーツ」

tapis-brosse (「マット」 + 「ブラシ」 →) 「靴ふきマット」

voiture-restaurant (「車両」 + 「食堂」 →) 「食堂車」

(b) 名詞₂は名詞₁と外見や形状の似ているもの。

chapeau melon (「帽子」 + 「メロン」 →) 「山高帽」

chou-fleur (「キャベツ」 + 「花」 →) 「カリフラワー」

homme-sandwich (「人」 + 「サンドイッチ」 →) 「サンドイッチマン」

oiseau-lyre (「鳥」 + 「竝琴」 →) 「コトドリ」(尾羽の形状が竝琴に似ている)

oiseau-mouche (「鳥」 + 「蠅」 →) 「ハチドリ」(小さくて羽音が似ている)

poisson-chat (「魚」 + 「猫」 →) 「ナマズ」(長い口ひげが特徴)

poisson-lune (「魚」 + 「月」 →) 「マンボウ」(満月のような丸い体形)

(c) 名詞₂は名詞₁と特性の似ているもの。

émission(-)vedette (「番組」 + 「スター、花形」 →) 「人気番組」

homme-grenouille (「男」 + 「蛙」 →) 「潜水夫」

nouvelle-éclair (「ニュース」 + 「稲妻」 →) 「ニュース速報」

roman-fleuve (「小説」 + 「川、大河」 →) 「大河小説」

ville-dortoir (「都市」 + 「共同寝室」 →) 「ベッドタウン」

(d) 名詞₂は名詞₁に関連するもの。

appareil(-)photo (「器具」 + 「写真」 →) 「写真機、カメラ」

micro-cravate (「マイク」 + 「ネクタイ」 →) 「ピンマイク」(ネクタイや襟に付ける)

motoneige (「オートバイ」 + 「雪」 →) 「スノーモービル」

coquille Saint-Jacques (「貝」 + 「聖ヤコブ」 →) 「帆立貝」(帆立貝は聖ヤコブの象徴物)

western-spaghetti (「西部劇」 + 「スパゲッティ」 →) 「イタリア製西部劇」⁽¹⁰⁾

2. 類似性に基づく名づけ

対象をそれとは別種の、形状や特性の似たものにたとえる名づけである。語形態としては、複合語と派生語が用いられる。

(1) [名詞+形容詞] / [形容詞+名詞]

前節の(3)の(b)と(c)の複合語では、補足部が類似物を指し、主要部は上位カテゴリーの名前であった。この節の(1)と(2)の複合語は、主要部(ひいては複合語全体)が類似物を表す。名づけに用いた複合語を転用して、さらに他の対象を指すこともある(下記のcerf-volantなど)。

cerf-volant (「鹿」 + 「飛ぶ」 →) 「クワガタムシ」「凧」⁽¹¹⁾

poule mouillée (「雌鶏」 + 「濡れた」 →) 「臆病者、怖がり屋」

faux jeton (「偽の」 + 「コイン」 →) 「偽善者、ペてん師」

millefeuille (「千の」 + 「葉」 →) 「(菓子の)ミルフィーユ」

(2) [名詞₁+前置詞+名詞₂]

包摂関係の場合と同じく、前置詞はàまたはdeがほとんどだが、deが大半を占める。deを含む複合名詞はとりわけ動植物の通名として用いられる。

[名詞₁ + à + 名詞₂]

(a) 補足部が用途を表す。

sac à vin (「袋」 + 「ワイン」 →) 「大酒飲み」

(b) 補足部が付属物を表す。

chou à la crème (「キャベツ」 + 「クリーム」 →) 「シュークリーム」

(c) 補足部が所有者を表す。

barbe à papa (「あごひげ」 + 「パパ」 →) 「綿菓子、綿あめ」

[名詞₁ + de + 名詞₂]

(a) 名詞₁が部分、名詞₂がその部分を含む全体を表す。

cul-de-sac (「尻、底」 + 「袋」 →) 「行き止まり、袋小路」

dent-de-lion (「歯」 + 「ライオン」 →) 「タンポポ」(葉の縁がギザギザしている)

gueule-de-loup (「口」 + 「オオカミ」 →) 「キンギョソウ」

œil-de-perdrix (「目」 + 「ヤマウズラ」 →) 「(足指の) うおのめ」

pied-de-poule (「足」 + 「雌鶏」 →) 「千鳥格子」

queue(-)de(-)cheval (「尾」 + 「馬」 →) 「ポニーテール」

tête-de-loup (「頭」 + 「オオカミ」 →) 「(天井掃除用の) 柄の長い箒」

(b) 名詞₂が材料や材質を表す。

bouton-d'or (「ボタン」 + 「金」 →) 「ミヤマキンポウゲ」

étoile d'argent (「星」 + 「銀」 →) 「エーデルワイス」

(c) 名詞₂が時、場所、事態などを表す。

belle-de-jour (「美人」 + 「昼間」 →) 「サンシキアサガオ」(花が日中に開く)

belle-de-nuit (「美人」 + 「夜」 →) 「オシロイバナ」(花が夕方開く)

étoile de mer (「星」 + 「海」 →) 「ヒトデ」⁽¹²⁾

trompette-de-la-mort (「らっぱ」 + 「死」 →) 「クロラッパダケ」

(3) [名詞+接尾辞]

接尾辞を用いる造語である派生語も名づけに用いられる⁽¹³⁾。派生語のもとになる語を基語という。類似性に基づく名づけに関しては、名づけの対象に似たものを指す語を基語にして、それに接尾辞を付加する(下に示す例では、接尾辞の部分に下線を引く)。接尾辞を付加する際に、基語名詞の綴り字や発音が変化することもある。

基語と派生語の指示対象が、同類異種とみなせる場合と、類が異なる場合とがある。

(a) 基語と派生語の指示対象は同類異種とみなせる⁽¹⁴⁾。

casque 「ヘルメット」 → casquette 「(庇の付いた) 帽子、ハンチング」

cigare 「葉巻」 → cigarette 「紙巻タバコ」

carte 「カード」 → carton 「ボール紙、厚紙」

craie 「白墨、チョーク」 → crayon 「鉛筆」

poivre 「コショウ」 → poivron 「ピーマン」

saucisse 「(加熱して食べる) ソーセージ」 → saucisson 「(サラミ風) ソーセージ」

(b) 基語と派生語の指示対象の類が異なる。

- cheval「馬」→chevalet「画架、イーゼル」(荷を載せる役目および4本脚の形が類似)
 corne「角(つの)」→cornet「円錐形の紙袋;(アイスクリームを入れる)コーン」
 œil「目」→œillet「(靴などの)紐通し穴、鳩目」
 pomme「リンゴ」→pommette「頬骨」
 lune「月」→lunette(s)「めがね;望遠鏡」(満月とレンズの形状類似)
 dent「歯」→dentelle「(編み物の)レース」(レースの縁が歯のようにギザギザしている)
 moine「修道士」→moineau「スズメ」(茶色の修道服姿が雀と似ている)
 ours「熊」→oursin「ウニ」(色と形状、とりわけ熊の剛毛とウニのとげの類似)

3. 関連性に基づく名づけ

包摂や類似以外の関連性に着目する名づけもある。この場合もおもに複合語あるいは派生語が使われる。

(1) [名詞+形容詞] / [形容詞・接頭要素+名詞]

このタイプの複合語は、実体を指す語を明示せずに、特徴的な部分によって全体を表すものが多い。複合語の性はそこに含まれる名詞の性と同じだが、暗示される主要部の性と同じになることがある(たとえば、下記のrouge-gorgeはoiseau「鳥」と同じ男性名詞)。

[名詞+形容詞]

- bec fin (「くちばし」+「鋭敏な」→)「口の肥えた人、食通」⁽¹⁵⁾
 casque bleu (「ヘルメット」+「青い」→)「国連平和維持軍の兵士」
 col blanc (「襟」+「白い」→)「事務系職員、ホワイトカラー」
 main courante (「手」+「流れるように進む」→)「(階段やエスカレーターの)手すり」

[形容詞・接頭要素+名詞]

- mille-pattes (「千の」+「足」→)「多足類、ムカデ」
 rouge-gorge (「赤い」+「喉」→)「ロビン、ヨーロッパコマドリ」(喉のあたりが赤い)
 tricycle (「3つの」+「輪」→)「3輪車」
 unicomme (「単一の」+「角(つの)」→)「一角獣」

(2) [名詞₁+前置詞+名詞₂] / [名詞₁+名詞₂]

この構造の複合語で関連性を表す例はあまり多くはない。下記のような、主として空間的な隣接関係に基づく名づけの例が見られる。

- bouche à l'oreille (「口」+「耳」→)「ロコミ」(字義は「口から耳へ」)
 dessous-de-table (「下」+「テーブル」→)「賄賂、袖の下」(テーブルの下(の引き出し)を利用したことから)

micro-trottoir (「マイク」 + 「歩道」 →) 「街頭インタビューによる世論調査」
 pot-au-feu (「壺、鍋」 + 「火」 →) 「(料理の) ポトフ」
 rond-de-cuir (「円形のもの」 + 「革」 →) 「事務員、小役人」(椅子に円い革クッションを敷いて座る典型イメージから)

(3) 〔前置詞・接頭要素 + 名詞〕

この構成の複合語は主要部の名詞がなく、属性を表す補足部が名詞化して「……のもの」を意味する。主要部がないので男性名詞になるのが原則だが、暗示される主要部の性と同じになるものもあり(たとえば、下記の *entrecôte* は *viande* 「肉」と同じ女性名詞)、人を指す場合は男性名詞にも女性名詞にもなる(下記の *sans-emploi* など)。

antivol (「盗難を防ぐ」 →) 「盗難防止装置」
avant-propos (「話の前にある」 →) 「序文、前書き」⁽¹⁶⁾
contrepoison (「毒に対抗する」 →) 「解毒剤」
en-tête (「上部にある」 →) 「レターヘッド」
entrecôte (「肋骨の間にある」 →) 「(牛の) 肋間肉、リブロース」
hors-d'œuvre (「作品 [手間をかけた料理] の外にある」 →) 「オードブル、前菜」
parapluie (「雨を避ける」 →) 「雨傘」
sans-emploi (「職のない」 →) 「無職の人、失業者」
sous-sol (「地面の下にある」 →) 「地階、地下室」
surnom (「名前の上にある」 →) 「あだな、異名」

(4) 〔動詞 + 名詞〕

動詞を組み入れた複合語にはいくつかのタイプがあるが⁽¹⁷⁾、最も多いのが〔動詞 + 名詞〕の構成である。動詞は3人称単数形、名詞は目的語に相当し、複合語中では一般に無冠詞で用いられる⁽¹⁸⁾。動詞の主語、すなわち名づけの対象を指す語は示されないが、「……を……するもの」を意味し、多くは事物を、まれに人を指す。この構成の複合語は作りやすくわかりやすいので、とりわけ器具・機器の名前としての造語が多い。

名詞の性や数といった文法的な事柄に関して述べると、まず複合語全体の性は、主要素を含まないので男性名詞になるのが原則であり⁽¹⁹⁾、人を指す場合は男性名詞にも女性名詞にもなる。また、複合語中の名詞を単数形にするか複数形にするかは、文中での動詞と目的語の場合と同様に考えればよいのだが、どちらでも使われる語もあり慣用は一定していない(下記の例では複数のsをカッコに入れて示してある)。

abat-jour (「明かりを弱める」 →) 「(電灯などの) 笠、シェード」
appui-bras (「腕をもたせかける」 →) 「(列車や自動車の座席の) ひじ掛け」
casse-noix (「クルミを割る」 →) 「クルミ割り器」

- chauffe-eau (「水を熱くする」→)「湯沸かし器」
 chausse-pied (「足に靴をはかせる」→)「靴べら」
 coupe-ongle(s) (「爪を切る」→)「爪切り」
 couvre-lit (「ベッドを覆う」→)「ベッドカバー」
 cure-oreille(s) (「耳を掃除する」→)「耳かき」
 gratte-dos (「背中を搔く」→)「(背中を搔く道具の) 孫の手」
 lave-vaisselle (「食器を洗う」→)「食器洗い機」
 ouvre-boîte(s) (「缶を開ける」→)「缶切り」
 passe-temps (「時を過ごす」→)「暇つぶし、趣味」
 pèse-personne (「人の体重をはかる」→)「体重計、ヘルスマーター」
 porte-monnaie (「小銭を持ち運ぶ」→)「小銭入れ、がま口」
 rince-doigts (「指をすすぐ」→)「フィンガーボール」
 risque-tout (「すべてを危険にさらす」→)「向こう見ずな人、無鉄砲な人」
 sèche-cheveux (「髪を乾かす」→)「ヘアドライヤー」
 souffre-douleur (「苦痛を被る」→)「なぶり者、いじめの標的」
 tire-bouchon (「栓を引き抜く」→)「(ワインなどの) コルク抜き、栓抜き」
 tournevis (「ねじを回す」→)「ねじ回し、ドライバー」

(5) [名詞+接尾辞] / [動詞+接尾辞]

派生語は、前節で見た類似性に基づく名づけだけでなく、関連性に基づく名づけにも用いられる。基語は名詞あるいは動詞で、名づけの対象は人も物もある。

[名詞+接尾辞]

(a) 派生語が人を指す。人は職業人や専門家を初めとするさまざまな関係者。

- fleur「花」→ fleuriste「花屋、花売り」
 musique「音楽」→ musicien「音楽家」
 vigne「ブドウ」→ vigneron「ブドウ栽培者」
 lycée「高校」→ lycéen「高校生」
 stage「研修」→ stagiaire「研修生」
 banlieue「郊外」→ banlieusard「郊外の住人」
 prison「刑務所」→ prisonnier「囚人」

(b) 派生語が物を指す。物は容器、用具、設備、飲物、動植物などさまざまだが、それらのほんとは、部分に対する全体や空間的な隣接物とみなすことができる。

- sucre「砂糖」→ sucrier「砂糖入れ」
 thé「茶」→ théière「急須、ティーポット」

bras 「腕」 → bracelet 「腕輪、ブレスレット」
 manche 「袖」 → manchette 「袖飾り、カフス」
 dos 「背」 → dossard 「背番号、ゼッケン」
 cul 「尻」 → culotte 「半ズボン、ショートパンツ」
 oreille 「耳」 → oreiller 「枕」
 ombre 「日陰」 → ombrelle 「日傘、パラソル」
 boulanger 「パン屋の主人」 → boulangerie 「パン屋の店」
 rose 「バラ」 → roseraie 「バラ園」
 citron 「レモン」 → citronnade 「レモネード」
 tête 「頭」 → têtard 「オタマジャクシ」(頭部が大きい)
 pomme 「リンゴ」 → pommier 「リンゴの木」
 bleu 「青」 → bleuet 「ヤグルマギク」(花が青い)

〔動詞 + 接尾辞〕

(a) 動詞の表す行為を、多くは専門的に行う人を指す。接尾辞は動詞の語幹に付けるのが原則である。

chanter 「歌う」 → chanteur 「歌手」
 consommer 「消費する」 → consommateur 「消費者」
 étudier 「学ぶ」 → étudiant 「学生」
 présider 「主宰する」 → président 「会長、議長」

(b) 道具や機器、設備などを指すものが大半だが、行為の主体や行為の結果としての産物を指すこともある。

jouer 「遊ぶ」 → jouet 「おもちゃ、玩具」
 allumer 「火をつける」 → allumette 「マッチ」
 écouter 「聞く」 → écouteur 「イヤホン」
 raser 「剃る」 → rasoir 「かみそり、シェーバー」
 couvrir 「覆う」 → couverture 「毛布、掛け布団；(本などの)表紙」
 boucher 「ふさぐ、栓をする」 → bouchon 「(差し込み式の)栓」
 éventer 「あおぐ、風を送る」 → éventail 「扇」
 clignoter 「点滅する」 → clignotant 「(車の)ウインカー」
 imprimer 「印刷する」 → imprimante 「(コンピュータの)プリンター」
 bombarder 「爆撃する」 → bombardier 「爆撃機」
 patiner 「スケートをする」 → patinoire 「スケート場」
 garer 「車を駐車させる」 → garage 「車庫；自動車修理工場」
 sauter 「跳ねる」 → sauterelle 「バッタ、イナゴ」

griller 「網焼きする」 → grillade 「(網焼きの) ステーキ」

bâtir 「建てる」 → bâtiment 「建物」

4. 名づけの指示対象と「類」

以上、事物間に認めうる包括関係、類似性、関連性に基づいて、名づけの事例を分類して示してきた。しかし、ことばの分類には曖昧さが伴う。名づけの分類基準はやや漠としており、分類すべき対象の捉え方も一様ではない。それゆえ、本稿で扱ったような具体物を指す名前についてさえ、その名づけのタイプを決めかねることがある。名づけに付随する問題としてまずこの点に触れよう。

「包摂関係に基づく名づけ」による複合語は、主要部の名詞が「類」を表し、複合語全体が「種」を表すと規定した。けれども、この類種関係は分類学上のそれとは必ずしも一致しない。たとえば、chou 「キャベツ」と、それを主要部とする chou-fleur 「カリフラワー」や chou de Bruxelles 「芽キャベツ」(字義は「ブリュッセルのキャベツ」)や chou chinois 「白菜」(字義は「中国のキャベツ」)の場合である。キャベツ、カリフラワー、芽キャベツ、白菜は、植物学上の分類ではいずれもアブラナ科アブラナ属の植物であり、カテゴリーの上下関係はない。名前の主要部としての「類」は、対象を知る糸口であるから、わかりやすくなければならない。そのためには、上位カテゴリーに言及して「何々の一種である」と表現する一般的な方法のほかに、当該カテゴリーの代表的事物を引き合いに出して「何々の同類である」と紹介するやり方もある。前記の名前の「類」として chou 「キャベツ」を用いるのは、誰もが見知っている野菜なので、馴染みのない野菜を知るための拠り所として適当だからである。身近なものを指す日常語が多くの複合語の主要部になっていることは、第1節で挙げた名づけの例からも明らかであろう。

次に、動物名の例を見てみよう。

canard mandarin 「オシドリ」(字義は「マンダリンのカモ」)

chauve-souris 「コウモリ」(字義は「禿げたネズミ」)

cochon d'Inde 「モルモット」(字義は「インドのブタ」)

écureuil volant 「モモンガ」(字義は「飛ぶリス」)

名づけの対象(オシドリなど)と複合語の主要部の名詞が指す対象(カモなど)が、動物学で同類に分類されているものもそうでないものもある。包摂の定義を厳格に適用すれば、包摂関係に基づく名づけは、科学的分類の階層関係に合致する場合に限定される。しかし、日常用いる名前は、学術用語とは違い、科学的分類に依拠してはいない。「何々に似ているから何々の同類だろう」という庶民的な見方や発想から生まれる。したがって、言語文化が異なれば名づけ方も違って来る。英語ではカリフラワーを花の一種とみなし、モルモットの和名はテンジクネズミである。上記の動物名についても、chouを主要部とする野菜の名前と同様に、類似性に基づくカ

テグリー化が行われたと考えれば、一定の範囲の中に包みこむという「広義の包摂関係」が成立していることになる。

一方、chou à la crème「シュークリーム」、rat d'hôtel「ホテル荒らし」（字義は「ホテルのネズミ」）、canard boiteux「落伍者」（字義は「びっこのカモ」）の指示対象は、主要部の指示対象とはまったく別のカテゴリーに属し、容易に別物と認識できる。こうした表現はまさしく「類似性に基づく名づけ」である。

事実はどうあれ似ているから同類とみなしているのか、別物と知っていながら似ているものに見立てているのか、その判定は主観的、相対的にならざるを得ない。名づけの区分には明確な境界線はなく、境界付近はぼやけている。とりわけ動植物の通名は名づけの発想が多様なので、判断の難しい事例にたびたび出くわす。たとえば、cochonを主要部とする名前だけに限っても、上記のcochon d'Inde「モルモット」のみならず、cochon des blés「ハムスター」（字義は「麦のブタ」）、cochon de fer「ヤマアラシ」（字義は「鉄のブタ」）、cochon de terre「ツチブタ」（字義は「地面のブタ」）、cochon d'eau「カピバラ」（字義は「水のブタ」）、cochon de mer「ネズミイルカ」（字義は「海のブタ」）など、分類に迷う例は少なくない。

5. 単純語の転用

複合語や派生語は新たに作り出すことができる。実際、現用の複合語・派生語の多くは名づけのための造語であった。一方、単純語は所与のものであり、企業名や商品名などの特殊ケースを除けば、社会に流通する新語を作り出すことはできない。単純語を名づけに用いるとすれば、本来の指示対象以外のものの名前として転用する場合である。次のような例を挙げることができる。

éclair「稲妻」→「(菓子の) エクレア」⁽²⁰⁾

grue「鶴」→「クレーン」

trombone「トロンボーン」→「(書類をとめる) クリップ」

camembert「カマンベール (チーズ)」(産地のCamembertから)

madeleine「(菓子の) マドレーヌ」(初めて作ったとされる女性Madeleineから)

silhouette「影絵」(黒紙の切り絵肖像を好んだとされる人物Silhouetteから)

しかしながら、転用の判断はしばしば微妙になる。意味領域と名前の関係や、名づけの意識や感覚など、心理的側面がからむからである。

ほとんどの名詞は多義であり、辞書にはいくつもの語義が載っている。意味と名づけを単純に結びつければ、名詞はものの名前であり、名前の指示対象が語義である。すると、多義語とは指示するものが多岐にわたる名前ということになる。たとえば、glaceの原義は「氷」であり、類似性に基づく意味の拡大によって、「板ガラス」や「アイスクリーム」なども指すようになった。すなわち、「板ガラス」や「アイスクリーム」もglaceと呼ぶようになったのである。このこと

は、それらに *glace* という名前をつけたという見方もできるが、複合語や派生語を用いる「名づけ」とは少し違う気がする。複合語や派生語の場合は、新たな名称を作り出して名前をつけるという積極的な意図が感じ取れるが、*glace* のような単純語の名前が指示する対象については、名づけの能動性をあまり感じるができない。多義性に違和感が少なければ少ないほど、かつて起こったであろう名づけの実感が薄くなる。*bœuf* 「(家畜の) 牛 / 牛肉」、*verre* 「ガラス / コップ」、*rouge* 「赤 / (化粧用の) 紅」などは、「名づけ感」がさらに弱い。フランス語を母語とする人にとって、「(家畜の) 牛」と「牛肉」はもともと *bœuf* の指示対象であり、まとまったひとつの概念なのでなのであろう⁽²¹⁾。言うまでもなく、同じ名前で呼ぶか異なる名前をつけるかは言語文化によって異なる。この節で挙げた例の大半は、フランス語で同一名で指示する対象を、日本語では別個の対象として捉え、それぞれを別の名前で呼んでいる。むしろ、その逆の事例も多数ある。

「名づけらしさ」の程度は、対象を別物と認識する度合いや、名づけの意図を感じる強さに比例する。一般に、企業や商品の名前や人のあだ名などは名づけ度が高い（ただし、個別的であり通用する範囲が狭いので、一般化して辞書の語義として載るものは多くない）。転用の例として最初に挙げた語が中間からやや上のレベルで、*glace* はやや下のレベル、*bœuf*, *verre*, *rouge* などは、名づけを広義に解しても、周辺的である。

6. 複合名詞の短縮

言語表現には経済性の原則が働いており、情報伝達に支障がない限りなるべく簡略な表現を用いる。複合名詞に関してであれば、その一部を省略して短い表現形態にするが、類を表す主要部を省略する場合と、種別を示す補足部を省略する場合とがある。

(1) 複合名詞の主要部の省略

(a) 主要部の特徴を表す形容詞が残り名詞化する。

téléphone portable → *portable* 「携帯電話」(字義は「携帯できる電話」)

train rapide → *rapide* 「特急列車」(字義は「高速の列車」)

bœuf bourguignon → *bourguignon* 「牛肉の赤ワイン煮」(字義は「ブルゴーニュの牛肉」)

chat siamois → *siamois* 「シヤム猫」

(b) 主要部に関係するものを表す語句が残る⁽²²⁾。もとの複合名詞は包摂関係に基づく名づけであるが、短縮後の表現は関連性に基づく名づけになる。

chaussures à talons hauts → *talons hauts* 「ハイヒールの靴」

four à micro-ondes → *micro-onde(s)* 「電子レンジ」(字義は「マイクロ波のレンジ」)

bière (à la) pression → *pression* 「生ビール」(字義は「圧力のビール」)

bureau de poste → *poste* 「郵便局」

cabaret de café → café 「カフェ」(字義は「コーヒーの居酒屋」)

salle de cinéma → cinéma 「映画館」

boîte de conserve → conserve 「缶詰」(字義は「保存の缶」)

eau-de-vie de Cognac → cognac 「コニャック」(字義は「コニャックの蒸留酒」)

costume tailleur → tailleur 「テーラードスーツ」

(2) 複合名詞の補足部の省略

類の名前である主要部が残る。複合名詞では補足部で種別が明示されているが、短縮後の表現は類の名で種を指すことになる。

coffre fort → coffre 「金庫」(字義は「丈夫な大箱」)

coton hydrophile → coton 「脱脂綿」(字義は「吸水性の綿」)

tableau noir → tableau 「黒板」

chambre à coucher → chambre 「寝室」

rouge à lèvres → rouge 「口紅」

sac à main → sac 「ハンドバッグ」

courses de chevaux → courses 「競馬」

jaune d'œuf → jaune 「(卵の) 黄身」

timbre-poste → timbre 「郵便切手」

これらのすべてが複合名詞からの省略形であると断定はできない。辞書の記述にも異同がある。また、省略によって作り出された表現だとしても、フランス語話者がそれを意識しているとは限らない。省略によって単純語が残る(1)(b)のcaféやcognacなどについては、前節で見たような、名前の転用とみなすこともできるだろう。また、(2)のタイプの場合も、複合語の省略ではなく、œuf「卵」がふつう「鶏卵」を指すような、社会常識や場面に応じて指示対象が縮小し特定化される現象である、という見方もできる。

おわりに

名づけにおける対象の捉え方とそれを具体化する語形態を分類し、分類にかかわる問題のいくつかについて述べた。名づけの構造を探るアプローチの仕方はほかにもあり、違った分類方法も考えられよう。いずれにしても、名づけの体系を明らかにするためには、データの範囲を広げて分類法を検討するとともに、本稿で扱わなかった他の名づけ方も考察する必要がある。

本論考で対象とした言語はフランス語であるが、名づけのあり方には他の言語にも共通する一般性がある。一方、言語表現はそれを用いる言語共同体の歴史・社会・文化を反映するものであるから、名前のつけ方や表し方は一様ではない。フランス語の表現を日本語や英語、その他の言語と比べれば興味深い事実が数多く見つかるに違いない。

注

- (1) 事物間のこれら3つの関係は、修辞学および意味論というシネクドキ（提喩）、メタファー（隠喩）、メトニミー（換喩）にほぼ対応する。認知言語学の分野では、従来のレトリックとしての比喩が見直され、研究の成果は目覚ましい。本論考は意味論的観点からの考察が主眼ではないが、参考図書として挙げてある著書から着想のヒントを得た箇所もある。
- (2) すでに存在している名前に何らかの変更を加えて新たな呼称を作り出すこともできる。たとえば、「語の短縮」(professeur「教師」→prof)や「略号」(bande dessinée「マンガ」→BD)や「混成」(camé(ra)「カメラ」+(magnéto)scope「ビデオデッキ」→caméscope「ビデオカメラ」)などである。こうした変形による名づけも興味深い、本稿では扱わない。
- (3) 狭義の複合語については、構成する部分の意味から全体の意味を論理的に推測できず（たとえば、grand magasin「デパート」は単に「大きい商店」ではない）、構成要素の一部のみに修飾語を付けることができない（très grand magasinは「とても大きい商店」であり「デパート」を意味しない）などの判定基準を設けることができるが、ここでは、複合名詞を「あるカテゴリー（としてまとめられる事物）を指す語群」といったゆるやかな定義で用いる。
- (4) 接頭辞と接頭辞的語形成要素を指す。いずれも、形容詞（および前置詞など）と同様の働きをしよう。
- (5) poly- + -gone「角」→polygone「多角形」のような、名詞と等価の語形成要素を用いる複合もこのパターンに含めることができる。
- (6) àとde以外の、たとえばen, pour, sansなどを用いることもあるが、これらの前置詞は意味がより限定されており、名詞₁と名詞₂の関係性を理解しやすい：arc en ciel「虹」、sucre en morceaux「角砂糖」、chaussures pour dames「婦人靴」、boisson sans alcool「ノンアルコール飲料」など。
- (7) 冠詞や前置詞の使用が一定していないものもある。たとえば、boîte à [aux] lettres「郵便ポスト；郵便受け」、œufs au [sur le] plat「目玉焼」、sac à [de] terre「土嚢」。また、前置詞（および冠詞）を省略することもあり、その場合は（3）の〔名詞₁+名詞₂〕の構造になる。たとえば、stylo à bille → stylo(-)bille「ボールペン」、bière à la pression → bière pression「生ビール」。
- (8) 例外的に名詞₂が主要部の語もある：chef-lieu「県庁所在地」、radio-taxi「無線タクシー」など。
- (9) 対象が同じであっても、いずれの要素を主要部にするかによって性が異なることがある。たとえば、「女医」を意味するfemme médecinは女性名詞だが、médecin femmeは男性名詞、「腕時計」を意味するmontre-braceletは女性名詞、bracelet-montreは男性名詞。
- (10) 英語のspaghetti westernの翻訳らしい（日本では「マカロニウエスタン」を造語した）。ほかにも、英語を初めとして他の言語の表現をフランス語に翻訳した複合語はかなりある：service station → station-service「サービスステーション」、flying saucer → soucoupe volante「空飛ぶ円盤」、ドイツ語のKindergarten「幼稚園」（字義は「子供の庭」）を翻訳したjardin d'enfantsや、ラテン語のmalum terrae「ジャガイモ」（字義は「地のリンゴ」）をもとにしたpomme de terreなど。ただし、由来を綿密に記載した辞書や資料が乏しく、翻訳かどうかの判断を容易に下せない表現も多い。
- (11) 語源が異なるという説もある（cf. *Trésor de la Langue Française informatisé*）。
- (12) 海に棲む動物を身近でイメージしやすい動物や物にたとえることが多いので、[… de mer]「海の……」の複合名詞は多数ある。たとえば、éléphant de mer「ゾウアザラシ」（字義は「海のゾウ」）、lion de mer「アシカ」（字義は「海のライオン」）、araignée de mer「ケアシガニ」（字義は「海のクモ」）、scorpion de mer「カサゴ」（字義は「海のサソリ」）、châtaigne [hérissin] de mer「ウニ」（字義は「海のクリ [ハリネズミ]」）、anémone de mer「イソギンチャク」（字義は「海のアネモネ」）、concombre de mer「ナマコ」（字義は「海のキュウリ」）、gelée de mer「クラゲ」（字義は「海のゼリー」）。
- (13) 一般には接頭辞派生と接尾辞派生を合わせて派生と呼ぶが、両者の性質はかなり異なるので、むしろ接頭辞派生は複合と一緒にし、接尾辞派生はそれらと別に扱うのが適当だと思われる。

- (14) 同類異種の事例は広義の包摂関係とみなすこともできる。第4節を参照されたい。
- (15) becは元来は「(鳥の)くちばし」を指すが、この表現では「(人の)口」を指し、「味覚」を含意している。
- (16) [avant-...]のavantは、名詞のように解釈されて、「……の前部」(= l'avant de ...)の意味になることがある。たとえば、avant-bras「前腕」、avant-garde「前衛」。avant-scèneは「舞台の手前(実際には両側)の席」と「舞台の前部、エプロンステージ」のいずれも指す。文法上の性については揺れがあるが、複合語の指示対象が複合語中の名詞の指示対象の一部あるいはそれと同種の場合は、複合語中の名詞の性と同じになることが多い：avant-gardeやavant-veille「前々日」などは女性名詞。また、複合語中の名詞の性に影響されることもしばしばある：avant-guerreは男性名詞としても女性名詞としても扱われるし、avant-scèneはどの意味であっても女性名詞、avant-première「(初日の前の)試写会、試演会」も女性名詞である。[arrière-...]や[contre-...]など、他の前置詞を含む複合語についても[avant-...]と同様の現象が見られる。
- (17) [動詞+副詞]の表現もある：couche-tard「遅く寝る」→「宵っ張りの人」、passe-partout「どこでも通る」→「マスターキー」など。また、faire-part「通知する」→「通知状」、laissez-passer「そのまま通せ」→「通行許可証」など、不定詞や命令形を用いた複合語もある。
- (18) trompe-l'œil「目を欺く」→「だまし絵」など、目的語名詞に冠詞が付くごく少数の例外がある。
- (19) 例外的に女性名詞のものとしては、garde-robe「ドレスを保管する」→「衣裳戸棚(この意味は古風になった)：(個人の)持ち衣装」がある。perce-neige「雪を突き抜ける」→「スノードロップ、ユキノハナ」は一般に男性名詞だが、女性名詞としても扱われる。
- (20) 由来には、菓子を食べる素早さ、菓子の表面が光る様子などの諸説ある。
- (21) 対象を同一物と認識しているわけではない。場面や文脈に応じて個体(家畜の牛)あるいは物質(食用の牛肉)として捉え、冠詞や単数・複数の形態を使い分けている。
- (22) coq [poule] d'Inde「インドの鶏」→dinde「七面鳥」のように、短縮で残った語句が単純形になったものもある。marchand d'ail「ニンニク売り」→chandail「厚手のセーター」(パリ中央市場の野菜売りが着ていたことに由来)は短縮の仕方も特殊である。

参考図書・論文

- 川口順二(1999)「ふたたび動物の名前をめぐる」、『藝文研究』77、慶應義塾大学藝文学会。
- 瀬戸賢一(2005)『よくわかる比喩』研究社。
- 谷口一美(2003)『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』研究社。
- 深田智・仲本康一郎(2008)『概念化と意味の世界—認知意味論のアプローチ』研究社。
- 深谷昌弘・田中茂範(1996)『ことばの〈意味づけ論〉—日常言語の生の営み』紀伊國屋書店。
- 森岡健二・山口仲美(1985)『命名の言語学—ネーミングの諸相』東海大学出版会。
- Anscombe, J.C. (1990), « Pourquoi un moulin à vent n'est pas un ventilateur », *Langue française*, 86.
- Gross, G. (1988), « Degré de figement des noms composés », *Langages*, 90.
- Rosch, E. (1978), « Principles of categorization », in E. Rosch and B. Lloyd (Eds.), *Cognition and categorisation*, Hillsdale, NJ: LEA.
- [参照したおもな辞典]
- 『小学館ロベール 仏和大辞典』小学館。
- 『ロワイヤル仏和中辞典』第2版、旺文社。
- 『プチ・ロワイヤル仏和中辞典』第4版、旺文社。
- 『ランダムハウス英和辞典』第2版、小学館。
- Le Nouveau Petit Robert de la Langue Française*, Le Robert.
- Le Grand Robert & Collins: Dictionnaire français-anglais et anglais-français*, Le Robert.
- Trésor de la Langue Française informatisé*, CNRTL.